



文学教材における「題名読み」と「主題読み」：  
杉みき子「わらぐつの中の神様」(小学校五年)を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2013-01-11 キーワード: 作成者: 菅原, 利晃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007398">https://doi.org/10.32150/00007398</a>

# 文学教材における「題名読み」と「主題読み」

— 杉みき子「わらぐつの中の神様」(小学校五年)を通して —

菅 原 利 晃

—

物語・小説といった文学教材において、題名・タイトルを授業者が学習者に問い、考えさせることはいけないのだろうか。

例えば、小学校の文学教材では、宮沢賢治「やまなし」の場合、「なぜ題名は『やまなし』なのか」といった発問がある。これについて、宮城信夫氏は、この問いを提示し「創り出した学び」として、

「やまなし」という題名をつけた理由について、「ただやまなしが好きだから」「おいしいから」という考えから、仲間との学び合いを通して平和でおだやかな世界をめざしていた賢治の考え方、賢治が伝えたいことへと認識を変容していく。

と述べている(注1)。題名・タイトルを考えさせることを通

して、「賢治の考え方、賢治が伝えたいこと」の認識へと結びつけるという。「賢治の考え方、賢治が伝えたいこと」とは、言い換えれば、「やまなし」の主題である。題名・タイトルを考えさせることを通して、主題へ結びつけるというものである。ほかにも小学校の文学教材では、名木田恵子「赤い実はじけた」でも『「赤い実」とはなにか」と問うこともある(注2)。

中学校の文学教材では、太宰治「走れメロス」の場合、『「走れメロス」とはだれが(いつ)言ったことばか』などの発問が考えられよう。これに関して、大西忠治氏は、『「走れメロス」(太宰治)の題名は、とくに特徴的である。』として、

しかし、それならば何故「走れメロス」なのだろう。走るメロス、あるいは、メロスは走る……の方が正確ではないか。シルレルの「人質」の方がまだ明確である。「信実を王にわからせた」というのなら「ディオニス王」の方がむしろいいかもしれない。「王とメロス」でもいい、いっそ「友情」と

何故しなかったのであらうか。

走れ！と誰が命じているのか？ 神か、信実そのものなのか、自分の良心が命じるのか？ メロスとは誰か、悪い夢を見、いつそ悪徳者として生きてやろうとまで思ったメロスとは誰なのか？ 人間、弱さをもった人間、われわれ、太宰自身……。何故それは命令であり、呼びかけなのか、そこにははげましがあり、げきれいがあり、同時に、命からなら、あえぎながら走りつづけるものへの同情があり、何故走りつづけるのかという疑いもないわけではない。

してみると、この題名は、山場や終結部の大団円に微妙な陰影をつけ加える。

と述べている(注3)。文学教材の題名・タイトルが主題の読みに関わる顕著な例であり、題名・タイトルを考えさせることが必ずしも無視できるものではないことがわかる。

ほかにも中学校の文学教材では、夏目漱石「坊っちゃん」の場合は、「坊っちゃん」はどのような人物かなどの発問、井上ひさし「握手」では「握手」とはどのようなものかといった発問、魯迅「故郷」では、「故郷」とはどんなところかといった発問があるだろう。

高等学校の文学教材では、さらに発達段階に応じて題名・タイトルについて、主題に関わって深く問うことも可能である(注4)。例えば、芥川龍之介「羅生門」の場合、「羅生門」はなぜ「生」なのかなどといった発問が想定される。夏目漱石「こ

ころ」では、「こころ」とは一体だれの「こころ」なのかなどの発問があるだろう。梶井基次郎「檸檬」では、「わたし」ととって「檸檬」とはどのようなものか」あるいは、「語り手はなぜ「檸檬」を語っているのか」といった発問によって、いわゆる「檸檬体験」、檸檬による丸善爆破などを様々な点から考えさせることも可能である。

これらはいずれも、物語・小説といった文学教材の題名・タイトルについて、5W1Hのいずれかあるいはいくつかを問い、考えさせるということをもとにしているものである。その上で、物語・小説といった文学教材の主題に学習者を向かわせることが目的となる。

ただし、物語・小説といった文学教材の題名・タイトルのすべてが、主題に関わるものというわけではない。それぞれの文学教材によって、題名・タイトルの主題への関わり方が微妙に異なるのである。この点について、小澤賢三氏は、小学校の文学教材の「題名」について、次のように分類して示している(注5)。

まず、①の題名は、当然のことながら本文と深い繋がりを持つが、題名の意味は様ではない。次に筆者なりの分類を示す。(中略)本稿では教科書分析を基に、4分類を試みた。

- 分類は、次の通りである。
- A 登場人物(主人公)を表わすもの。
  - B 題材を表わすもの。

C Bのうち主題に繋がるもの。

D 本文の主題そのものを暗示するもの。

便宜上、A、Dのように分類したが、Cの記述でも明らかのように排他的なものではない。ただ、いずれも主題と何らかの関わりを持っている点は同じである。

そこで、本稿では、小学校の文学教材の一つである杉みき子「わらぐつの中の神様」を例として、題名・タイトルを学習者に考えさせるということに関して考察してみたい。小澤氏のいう分類でいえば、Dの分類にあてはまるものであるが、この場合は、「『神様』とは何だろう」という発問を想定し考察してみる。

## 二

杉みき子「わらぐつの中の神様」は、光村図書出版『国語五銀河』におさめられている物語教材である。単元は、「物語を讀んで、自分の考えをまとめよう」というものである。

本教材の梗概は次の通りである。

「マサエ」は、「おばあちゃん」からわらぐつをすすめられたが、みつもな思っていないやがる。そこで、「おばあちゃん」は、わらぐつの中に神様がいることを話す。その昔、ある「大工さん」が「おばあちゃん」（おみつさん）に次のように言った話である。見かけではなく、使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っていること、それがほんとうに

いい仕事なのだという話である。それを聞いた「マサエ」は、わらぐつの中にも神様がいることを理解する。

この教材の題名・タイトルにもある「神様」という言葉は、本文中に繰り返し使われている。その箇所をあげれば、次の通りである。すべて、会話の中に使われているので、便宜上、会話主も示し、会話部分をすべて抜き出してみる。

まず、「マサエ」と「おばあちゃん」との会話の場面、すなわち現在の場面では、

(A) 「おばあちゃん」：「そういったもんでもないさ。

わらぐつはいいもんだ。あつたかいし、軽いし、すべらんし。そうそう、それに、わらぐつの中には神様がいなさるでね。」

(B) 「マサエ」：「わらぐつの中に、神様だつて。」

(C) 「おばあちゃん」：「それじゃあ、ひとつ、わらぐつの話をしてやるかね。わらぐつの中に神様のいなた話をね。」

とある。次に、「わらぐつの話」、すなわち過去の回想から再び現在にもどった場面では、

(D) 「おばあちゃん」：「——それから、わかい大工さんは言ったのさ。使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じなんだ。それ

を作った人も、神様とおなじだ。おまんが来てくれ  
たら、神様みたいに大事にするつもりだよ、ってね。  
どうだい、いい話だろ。」

(E) 「マサエ」：「そいで、大工さん、おみつさんのこ  
とを、神様みたいに大事にした。」

(F) 「おばあちゃん」：「そうだねえ、神様とまではい  
かないようだったけど、でも、とてもやさしくしてく  
れたよ。」

(G) 「マサエ」：「ふうん。だけど、おじいちゃんがお  
ばあちゃんのために、せつせと働いて買ってくれたん  
だから、この書げたの中にも、神様がいるかもしれな  
いね。」

とあるが、(D) の会話は「わかい大工さん」が言った言葉を  
伝えているものであり、間接話法の形となっている。

### 三

本教材のあとに「①物語の特色をとらえよう。」として、六  
点があげられている。構成や方言、他作品との比較に関するも  
のほかに、内容に関するものとして次の三点がある。

▼「おばあちゃん」の思い出話を、次のような、わらぐつと  
人物との関係に気をつけて読もう。

・作ったわらぐつに表れている、「おみつさん」の人から。

・そのわらぐつのとらえ方に表れている、わかい「大工さ  
ん」の考え方や心の動き。

▼最後の場面で、「マサエ」のわらぐつに対する見方、「おば  
あちゃん」「おじいちゃん」に対する見方は、どのように  
変わっただろうか。どこから、そのことが分かるだろう。

▼人物の人がらや考え方が表れている言葉、場面の様子によ  
く表れている表現の中から、最も強く印象に残ったところ  
を書き出し、選んだ理由といっしょに発表しよう。

「物語の特色」と言いながらも、いずれも、この物語の題名・  
タイトルである「神様」についての問いとはなっていない。し  
かし、繰り返し使われている「神様」という言葉を直接考えさ  
せるのはいけないのだろうか。「神様」という言葉を読解上の  
重要な語として、授業者が学習者に提示し考えさせることは、  
重要な学習活動であろう。なぜなら、これが主題に関わるカギ  
となる言葉であるからだ。その中で、「神様」とは何だろう」  
という発問が想定される。

なお、このような問いは旧課程版ではなかったが、新課程版  
(平成二三年度版)では「②作品に対する自分の考えをまとめ  
よう。」として、次のように「神様」について考えさせるもの  
が新たに加わった。

▼次のような点から、あなたの考えをまとめよう。

・この物語の特色について

・最も強く印象に残ったことについて  
・わらぐつの中にいた「神様」について

「物語の特色」や「印象」という言葉が再提示され、「あなたの考えをまとめよう。」と、個々の読みを想定したようなものになっている。特に、三点目が旧課程版にはなかったものである。

しかし、もっと率直に単純に、「神様」とは何だろう」という問いでよいのではないだろうか。そのような問いこそが、題名・タイトルを考えさせ、主題に近づくことを可能にさせるものだからである。しかも、前掲の(D)(E)(F)には「わらぐつの中」という言葉がないし、さらには(G)では「雪げたの中」の「神様」と書かれているからである。「わらぐつ」との関わりについては後述する)。

さて、「神様」とは何だろう」という発問を想定すれば、(D)に「使う人の身になって、心をこめて作ったものには、神様が入っていると同じなんだ。」「それを作った人も、神様とおなじだ。おまんが来てくれたら、神様みたいに大事にするつもりだよ」とあるので、学習者からは、「相手を大事にする」「相手を思いやる」「心をこめる」という言葉を交えた答えが出るだろう。

これについて、西郷竹彦氏は、「ものが人間を意味づける」、「言葉の意味」として、

(わらぐつの中には神様がいなさる)という、(神様)というののもいってみれば比喩的な意味をもっているのです。そのわらぐつに作った人の真心がこめられている。そのこめられている真心を(神様がいなさる)というふうになぞらえた。喩え、比喩というのは意味なのです。比喩の意味といいます。(中略)(それを作った人も、神様とおなじだ。おまんが来てくれたら、神様みたいに大事にするつもりだ)とこういいます。この大工さんの言葉は(心をこめて作ったものには、神様が入っていると同じなんだ)というのは喩えなのです。比喩的な意味です。比喩の意味というのは、その(神様)というのには真心という意味をもっているといっているようにしょう。結局真心という意味を(神様)という喩えであらわしている、とこういったらいでしょうか。

と述べている通りである(注6)。

つまり、「神様」とは「真心」という意味をもつものであるというのである。前掲の「人物の人がらや考え方」を意識すれば、「神様とは、大事なものであり、相手のことを思いやるやさしさをあらわすものである。」というまとめになり、これが主題となるだろう。

ただ、ここで問題なのは、相手だけではなく、自分だけに関する「努力」などの言葉が学習者から出された場合の扱いである。「努力することは大切だ」という考えである。自分が、「向上心」をもち、「努力」した結果、「大事」なもの、すなわち「神

様」が生まれるというものである。これは、(G)に「せっせと働いて買ってくれたんだから、この雪げたの中にも、神様がいるかもしれないね。」とあることから、「せっせと」「努力」することの必要性を読みとることが可能なのである。

確かに、物語全体を見たとき、「わらぐつの話」すなわち回想の場面で、「おれなんか、まだわかぞうだけど、今にきつと、そんな仕事のできる、いい大工になりたいと思ってるんだ。」という「わかい大工さん」の言葉があるので、「努力」による自己実現だけを読みとることも可能である。地道な「努力」をすることで、自らも成長し、夢を実現させることができるのだということなのである。

さらには、わらぐつを「みったぐない(みつともない)」とする「マサエ」の言葉を利用すれば、「外見や格好にとらわれずに地道に努力せよ」という命題さえも浮かんでくる。その「努力」のあとにあるのが、「神様」である。

しかし当然、それには相手を思いやること、「大事にする」ことが加わる。(G)もしっかりと読めば、「わらぐつ」のことではないが、「おばあちゃんのために」とあり、相手のためであることに気がつくだろう。

「おばあちゃん」を大事に思った「わかい大工さん」。その「わかい大工さん」を大事に思って、雪けたを大事にしまっておいた「おばあちゃん」。相手を思う気持ちだが、相互・相乗作用を生み出しているのである。発展的に考えれば、「努力」や「向上心」もさることながら、「やさしさ」「愛情」すら指摘できる

ものである。

(A)の「おばあちゃん」の会話に、「そういったもんでもないさ。わらぐつはいいもんだ。あつたかいし、軽いし、すべらんし。」の「わらぐつ」を「相手」に置き換えてみれば、この部分では「相手」は「おじいちゃん」を指すものであり、「温かい心」「愛情」の持ち主と言えるのである。

「おみづさん」は当初、「そうだ、自分で働いて、お金を作ろう。そして、あの雪けたを買おう。」とあるように、自分のためだけにお金を作ろうと「努力」したのである。ただ、その際に、「はく人がはきやすいように、あつたかいように、少しも長もちするようにと、心をこめて、しっかりと作り、わらを編んでいきました。」とあるように、やがては、相手のために心をこめて仕事をするものすばらしさに気がつき、心がけるようになる。

つまり、自分のための「努力」が、相手のためになり、相手を思う心につながるのである。

先に、「神様」とは何だろう」という発問を提示したが、題名・タイトルに従えば「わらぐつの中の神様」とは何だろう」という発問が正確なものである。これによって、「わらぐつ(の中)」という語を通して、「相手を大事にする」「相手を思いやる」「心をこめる」といった読みも生まれるだろう。

自分のためだけの「努力」ではなく、相手のための「努力」、  
「真心」のこもった「努力」ということを考えさせたい。

#### 四

確かに、「努力」「向上心」「やさしさ」「愛情」などといった言葉に着目しすぎるのは、極端なことを言えはいわゆる「道徳的な読み」なのかもしれない。本文から逸脱した曲解であると「言われても仕方がない」。

しかし、学習者が、授業の中で、真剣で真摯な読解をこころみ、想像力をふくらませ、喩え、比喩としての意味を考え、自分の考えを深めることができれば、「道徳的な読み」もまた認められてよいのではあるまいか。それは、どのような人物が登場し、どのような行動をするのか、また、どのような考え方をし、どのように人とかわり合っているのか、という文学教材の至極当たり前な問いに、真つ正面から十分に取り組んだことになるのだから、決して逸脱したものではない。むしろ、教科書の単元名「物語を読んで、自分の考えをまとめよう」にふさわしいものでさえある。

翻って、「神様」とは何だろう」は、率直な問いである。題名・タイトルを問うものであるが、真つ正面から主題に迫る、十分な課題である。「マサエ」の考える「神様」、学習者の考える「神様」、授業者の考える「神様」がそれぞれ異なるケースもあるかもしれないが、いずれも必要な対話や意見交流を通してそれぞれに考えが深められ、主題に近づくことができる（注7）。これに関連して、大西忠治氏は、題名と主題とについて、次のように述べている（注8）。

主題が焦点的であり、集約的、概念的であるとすると、文学作品の題名も多くの場合、何らかの意味で主題を示し、暗示し、語っていると考えられる。説明的文章の場合は、むしろ主題＝論旨＝要旨を、題名は語らなくてはならないことが多い。題名はそれを示し、それを語るべきものである。

文学作品もまた題名は主題を語り、主題を示す性格はもっているが、説明的文章ほど直接的ではない。ある場合、題名が主題とはまったく関係がないように見えることすらある。（中略）しかし、どのような題名でも、何らかの形でその作品の主題とは関係をもっている筈で、もしも、作品の内容とまったく関係ないなら逆に、その関係のないことで、作品の主題に何らかの陰影を与えていくことにもなりかねないからである。

また、秋山欣彦氏は「題名読みの方法」として次のように示している（注9）。

題名読みは、題名から（うらの意味をさぐる）ことである。

さぐるためには、

- ① 題名と関係付けたことばを考えたり、
- ② 題名に関係のある事件を考えたり、
- ③ そのときの中心人物の心情などを考えなくてはならない。

秋山氏が示した「題名読みの方法」は、「授業計画の初めは簡単に最後の方のは詳しく、題名について考えさせた。」とあり、先に示した宮城信夫氏の宮沢賢治「やまなし」の授業実践も全十二時間中の十一時間目で「題名」について問うている。従って、題名・タイトルを問うのは、全授業計画のはじめがよいのか、おわりがよいのか、という問題もある。

これに関連して、「一読総合法」の読みの過程では、

・まずはじめに「題名読み」の過程があります。これこれの題名であるから、この文章にはこれこれのことが述べられているにちがいないと「予想・見とおし」をさせるのが、この過程での学習内容となります。

・つぎに、題名読みの予想・見とおしにもとづいて、(a)の部分だけを読ませる「立ちどまり読み」の過程があります。内容をしっかりと読ませるために分析・総合をさせる。そのために、読みの反応をテキストにチェックさせる「書きこみ」作業、分析したこと・総合したことをノートに書かせる「書き出し」作業をさかに行わせる。

とあり、授業計画のはじめにもおこなうことが述べられている(注10)。

物語・小説といった文学教材において、題名・タイトルを授業者が学習者に問い、考えさせることは有効な学習指導の一つである。それは、まさに文学教材に対する率直な、愚直なまで

の問いではあるが、真つ正面から主題に迫る有効な問いである。ただし、それには、いままで述べたように、題名・タイトルから主題をとらえさせるという観点に基づく、しっかりとした方法の確立が必要である。題名・タイトルは主題と何らかの関わりを持つていることを前提に授業を計画・構成しなければならぬ。

例えば、題名・タイトルに関わる表現を抜き出しさせ、それらの持つ比喩的意味をとらえさせ、関係のあることばや事件、中心人物の心情を考えさせる、話し合わせるなどの方法が必要である。

また、これらにはすべて、学習者の発達段階による学習の内容や授業者の適切な指示・助言を勘案する必要がある。

そして、題名・タイトルを問うタイミンクについては、学習計画のはじめとおわりとでどちらが有効かという読みの過程もまた考慮しなければならない。

いずれにせよ、われわれ教える側には、題名・タイトルを考えるということについて、学習者たる子どもたちに対して、真つ正面に向かうこと、例えば、前掲の「題名読み」のような発問・対話が必要である。さらに言えば、教材そのもの(題名・タイトル)に対しても、真つ正面から対話・対峙すること、すなわち素直で真剣な読みを、われわれ教える側も忘れてはならないし、当然のことではあるが、学習者である子どもたちにさせたものである。

注

- (1) 宮城信夫氏「集団の読みを深める——宮沢賢治『やまなし』の授業実践から——」(『琉球大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第一七号・二〇一〇年三月)による。
- (2) 秋山欣彦氏「読むための道具を身につけることにつぎる」(『教育学科学国語教育』三九巻二号・一九九七年二月)には、「赤い実はいじた」における「題名を読む」事例検証があげられている。
- (3) 大西忠治氏「文学作品の読み方指導」(明治図書・一九八八年一〇月)による。
- (4) 例えば、発達段階に応じた物語・小説教材の指導事項(教育内容)について、佐藤洋一氏「物語・小説の言語技術教育論——井上ひさし『握手』を中心に——」(『愛知教育大学研究報告・教育学編』四四・一九九五年二月)では、「物語・小説の『言語能力(教育内容)』一覽」において、「学年の発達段階」として、「1段階」の「その他」の一つに「題名」の暗示するもの(象徴性)を考えさせる」とあり、「3段階」の(1)として「主題(テーマ)」について知り、それについて、自分なりの「感想」「意見」をもつことができる。」の一つに「題名」の暗示すること」を示している。
- 「3段階」は小学校低学年では「部分的に身につけさせた指導事項(教育内容)」、小学校中学年では「おおよそ、身につけさせたい指導事項(教育内容)」、小学校高学年・中学校・高校では「全員に身につけさせるべき基礎基本的事項」と評価基準・到達目標を示している。
- (5) 小澤賢三氏「小学校国語科における文学教材の分析法に關する一考察」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』一九・二〇〇八年一月)による。なお、引用文中の「①」とは、小学校国語科の教科書の教材について「ものの見方や考え方を映し出すと考えられる諸概念を抽出した上で整理した十の観点のうちの一つ目ということである。
- (6) 西郷竹彦氏「意味を問う教育——文芸教材をゆたかに、深く読む——」(明治図書・二〇〇三年三月)
- (7) 春日由香氏「対話で言葉の世界を広げる児童詩創作指導——「題名」の指導を中心にして——」(『国語科教育』六九・二〇一一年三月)では、詩の題名についての先行論を多く引いてまとめているが、それとともに「対話」を中心とした詩の創作実践をあげ、「題名は、詩の全体像と常に関係性を保ち続けることになるだろう。」と述べている。題名を問うという学習は、物語・小説といった文学教材以外にも、詩においても重要な学習指導である。特に、詩の場合、題名を「0行目」として読まなければならないとしているが、翻って中高の漢詩の学習指導の場合などにおいても「題名読み」のもつ意味は大きいと思われる。
- (8) 注(3)の大西忠治氏の前掲書による。
- (9) 注(2)の秋山欣彦氏の前掲論文による。
- (10) 児童言語研究会「新・一読総合法入門」(一光社・一九

七六年八月)による。執筆者は小林喜三男氏。引用箇所の「(a)」とは、「(a)・(b)・(c)・(d)の四つの部分から構成されている文章があるとしましよう。」と述べており、構成を仮定したものである。